

援助職のリカバリー

《30》

～「夫が、若年性認知症になった」(3)～

袴田 洋子

「明日、行ってもいい？」

こんなふうに達夫に甘えたのは、久しぶりだった。もう 25 年になる「婚外恋愛」は、刺激というものには程遠く、単身赴任の夫と会っているような感覚だろうか、香は想像した。それでも、本物の夫と違うのは、セックスをすることだ。そして、たくさん話しをする。そう考えると、単身赴任というのは一概にマイナスな面だけではないようにも思えた。子どもに何か、問題が起きない限りは。

達夫に、夫が若年性認知症かもしれないこと、今度、大学病院の予約をとったこと、買い置きがあるのに同じものを何度も買ってしまうことなど、これまでの経過をざっと話した。話しながら、不倫相手に配偶者のことを話すなんて、なんて情けないことをしているのだろうと嫌気がさしたが、こんなことを話せるのは、達夫しかいなかった。

香の話を真剣に聞き終わると、達夫は、驚くことを言った。

「僕が以前勤めていた会社にも、いたよ。若年性認知症の人。当時は、若年、なんて名前は、多分、ついていなかったと思うけど。自分より、4年くらい上の先輩で、まだ、40代前半だったと思う。大変だなと思った。」

香は、想定していなかった達夫の言葉に驚きながら、自分の夫以外にも、若年性認知症の人がいる、という事実を聞いて、少しほっとした気分になった。と同時に、自分は、薬剤師という医療の専門職であるのに、あまりそういうことに関心を持っていなかったことも認識して、またもや至らない気持ちになっ

た。世の中では、もっと前から、同じ病気になって、不安になったり、混乱したり、嘆いたり、絶望したり、そんな気持ちになった人たちがいたのだ。私が知らなかっただけで。ある研修で、講師が言っていた。自分の実践領域の「近接」にいる人の話にも興味を持ちなさい、と。そのことは、自分の仕事の上で、悪いことではないはずだと。そのとおりだ。仕事どころか、自分自身に降りかかってきた。

達夫が以前、勤めていた会社は、TVのコマーシャルにもよく出てくる有名なグローバル企業だ。ずいぶん前から、障害者の雇用も行なっており、車椅子の社員がいて、自家用車で通勤していたという話を、香は達夫から聞いたことがあった。そのような会社の企業風土があったせいも、その40代前半で認知症になった人は、それまで営業職についていたが、記憶障害が出ていたために、社内勤務の部署に異動になったとのことだった。その後、しばらくして、うつ症状が出て、病欠になり、会社を辞めたらしい。

香は、自宅に向かう有楽町線の中で、知人の薬剤師の旦那さんが、うつ病で休職していると聞いたのを思い出していた。なぜ、思い出したのか。休職中でも、傷病手当という医療保険の給付金をもらっているから、助かっているという話だったからだ。うちの夫は、障害年金になるのだろうか。障害年金は、どのくらいもらえるのだろうか。そもそも、障害として、認定されるのだろうか。真衣は大学に行くつもりだ。学費を準備できるだろうか。これから、食べて行けるのだろうか。帰宅ラッシュ前の車内に、胸が締め付けられるような不安が広がった。

新宿医大の初診の日までの3週間は、あつという間だった。新宿医大を予約した翌週、信二が、配達途中で車の事故を起こしてしまったからだ。

ナビを使って運転していたが、正反対の方向に走ってしまっていたらしい。ナビの音声指示に従って運転していたものの、右折するところを左折、あるいは、左折するべきところを右折してしまっただけのために、なかなか目的地にたどりつかず、客から店に、予定の時間になったがまだ到着しない、いつ来るのかと電話が入った。店には、従業員の佐々木がいて、信二の携帯に電話をかけて、場所を確認し、タクシーで向かった。タクシーに乗った佐々木が店の配達車両を見つけ、料金を払って降りようとしたその時、信二は、車を方向転換させようとバックし、車両の後部を角の家の塀にぶつけてしまった。

あらかじめ、佐々木には、信二が認知症かもしれないことを話していたので、適確に行動してくれた。警察を呼び現場検証をし、客に電話をし、明日の配達になることを了解してもらった。破損した塀の家主にもお詫びをして、全面的に修理をさせてもらう交渉もしてきてくれた。警察は、配達が遅くなって焦ってしまったために、ハンドル操作を誤ったということで、事故を処理した。なぜ、配達が遅れたのかという点までは、聞かれなかった。

店に戻った佐々木は、薬局にいる香に電話をし、事情を説明した。電話を切り、薬局の仕事を早退して真っ先に店に向かうと、小さく丸まった信二の背中が、店のガラス扉の外から香の目に入った。

香が店に入ると、佐々木は、

「奥さん、申し訳ありません。ご心配をおかけしました」

と、謝罪の言葉を述べた。

「佐々木さん、とんでもない。謝るのは、こちらよ。本当に申し訳なかったです。いろいろ、本当にありがとう」

と、香は、頭を下げながら、大事故にならなかったことに、心底から安堵した。もう、夫には、車の運転は、させられない。冷静に事実を認識する気持ちと、いよいよ、夫が認知症であることが確実となってくることに對する気持ちとで、香は、泣きたくなった。

その日、店を少し早めに閉めることにし、佐々木にも帰るように言った時、

「奥さん、ちょっと車の修理のことで」

と、店の裏にある駐車場へと促された。車を見ながら佐々木は、

「社長の前では、ちょっと言いづらかったのですが、こちらに来てもらいました。

配達は自分が行きます、と、社長に言ったのですが、自分が行くからいいよ、と社長が言われて…。でも、やはり自分が行くべきだったと思います。明日からは、配達は、自分が行くようにします」

と、香を気遣いながら、言った。涙を拭いながら、香は佐々木に何度も何度も頭を下げた。